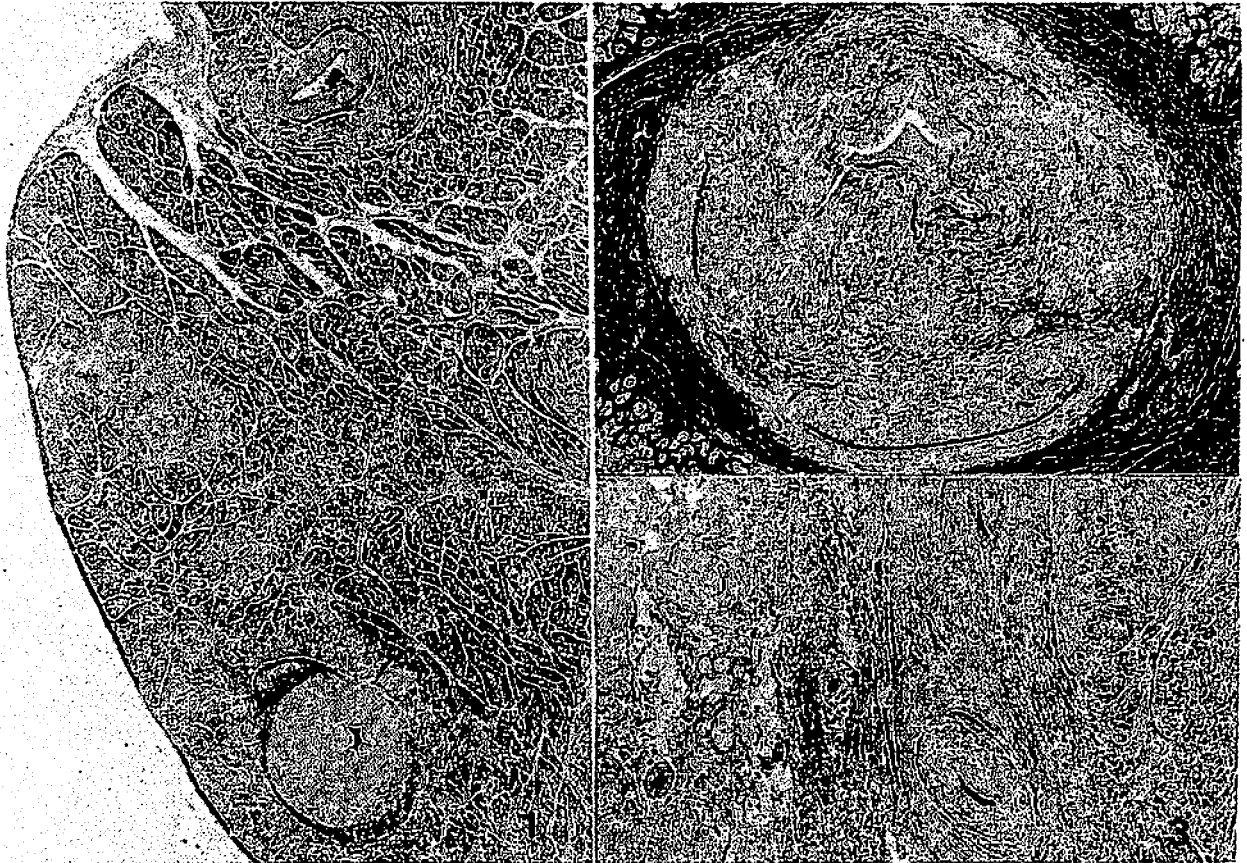


ウマの右心房

競走馬総合研究所病理研究室・

美浦トレーニングセンター競走馬診療所出題

第21回獣医病理学研修会標本No.341



動物：ウマ，サラブレッド種（競走馬），雄，2歳10ヵ月，体重428kg。

臨床的事項：本例には何ら病歴はなく，健康馬として競走に供用されてきた。しかし昭和55年3月22日，競走終了約3時間後に厩務員より競走後正常呼吸に復さない（呼吸促拍）との稟告を受け往診を乞われた。心電図上では心室性頻拍を示していた。更に約1時間後には転倒，強心剤投与（アノカカ静注）を試みたが，投与約10分後に斃死した（競走終了後4時間半の経過）。過去7回の競走経験あり。当日の競走成績は12頭中4着で，過去の競走成績も概して中庸を得ていた。

肉眼的所見：事情あって完全な剖検は出来なかったが，幸い斃死直後に全心房及び心室筋並びに肺の一部が被検材料となり得た。(1)右心房における広範囲かつ重度の斑状心筋腫（心筋に小指頭面大～拇指頭面大の不整形境界明瞭な灰白色斑密集或は散在）及び左心耳における小規模の巣状心筋腫（1.0×0.5cm）孤在。(2)左右心室筋における小規模の巣状心筋腫散在。(3)肺充血及び点状出血。

特に注目された点は右心房の心筋腫が分界溝或は分界稜に沿って存在していたこと（提出標本A及びB）であった。

組織学的所見：弾性型の洞房結節動脈（標本A，写真1の上方，HE，×11）より分岐した筋性型動脈（写真1

の下方）は著しい狭窄を示していた。極度に肥厚した管壁は増数した平滑筋線維よりなり，平滑筋線維は断裂した弾性板（線維）を堺として，外側に輪状に走行する筋線維層と内側に縦走する筋線維層とがあり，層状構造（二重構造）を示していた。外側の筋線維は増生した内側の筋線維に圧迫されていた。また弾性板（線維）は内膜との境界部にもみられ，中膜は明らかに内膜と区分されていた（写真2，EVG，×39）。即ち，この筋性型動脈は中膜の過形成による狭窄であった。

右心房内側部（標本A）から洞房結節動脈の末梢部分の存在する右心房内側前部（標本B）に及んで，洞房結節隣接領域あるいは洞房結節周囲の心筋筋は巣状の線維化を示していた。線維化巣は比較的細胞成分に乏しく，心筋線維の消失或は萎縮及び密な膠原線維或は膠原線維・脂肪組織の置換によって特徴づけられていた（標本B，写真3，HE，×29）。線維化巣内には小動脈の存在が目立ち，それらの小動脈は管壁の水腫性粗鬆化B至膨化，線維性肥厚或は中膜の二重構造を示す中膜過形成がみられた。

診断：突然死における(i)洞房結節動脈分枝の中膜過形成及び(ii)洞房結節隣接領域の限局性心筋線維化。(i)による(ii)とする意見があったが，今後心臓突然死の病理発生を考えていくにあたり，現段階ではあえて(i)と(ii)を並列しておきたい。